



# 営農NEWS



## キュウリのウイルス病を媒介する微小害虫の対策

近年、キュウリのウイルス病として「黄化えそ病」や「退緑黄化病」が発生し、その被害が問題となっています。

これらのウイルス病は、病原ウイルスや媒介昆虫が異なるものの、病徴は、従来から発生していた「黄化病」や苦土など微量要素欠乏症と類似し、病徴の観察だけでは病名の判断が困難な状況です。そのため、詳しく診断するためには公設機関における遺伝子診断や抗血清診断が必要になります。

黄化えそ病はミナミキイロアザミウマが媒介し、退緑黄化病はタバココナジラミ バイオタイプQが媒介、黄化病はオンシツコナジラミが媒介虫とされています。これらの媒介虫はいずれも微小な害虫で、育苗中や圃場内での発生量を十分に確認することが難しいことから、下記を参考にして、耕種的や物理的防除と薬剤防除を組み合わせた総合防除で対応する必要があります。アブラムシ類が媒介するウイルス病のCMVやWMV、ZYMVなども含めて、発病前からの徹底した防除に努めてください。また、産地として生産者全体で、一斉に取り組むことが重要になります。

### <防除対策のポイント>

微小害虫を防除する基本としては、栽培施設に害虫を①入れない、②そこで増殖させない ことが重要です。

①施設に入れない対策として、出入口や天窓・側窓など開口部に防虫ネット（タバココナジラミには目合い0.4mm）を設置します。また、害虫の飛来源、ウイルスの保毒源となる雑草等があれば、常に抜き取りや除草を徹底してください。育苗中は特に注意し、外からの感染株の持込や微小害虫の侵入などを注意深く遮断することが必要です。

②増殖させない対策としては、常に作物を観察して早期発見に努め、抜き取りや早期防除を行います。なお、施設内に青色や黄色の粘着トラップを設置して誘引し、密度の抑制を図るほか、薬剤防除時期の目安にします。薬剤の選択は、作期全般における総使用回数を考慮して選択し、また抵抗性害虫の出現を防ぐため、同一系統薬剤の連用は避けましょう。

さらに、栽培が終了したら③害虫が施設から逃げ出す前に、蒸し込み処理などで死滅させることが重要で、この処理により周辺ハウスや雑草への飛散防止、次作での侵入抑制効果が期待されます。

表1 キュウリ ミナミキイロアザミウマの主な防除薬剤（平成28年11月29日現在）

薬剤名	使用量または希釈倍率	使用時期／使用回数	備考
ベリマークSC	400倍 25ml/株 灌注	育苗期後半～定植当日／1回	アザミウマ類
	または 800倍 50ml/株 灌注		
ベストガード粒剤 ※	1～2g/株 植穴処理土壌混和	定植時／1回	
アフーム乳剤	2,000倍	収穫前日まで／2回以内	
カスケード乳剤	2,000～4,000倍	収穫前日まで／4回以内	
コテツフロアブル	2,000倍	収穫前日まで／3回以内	
スタークル顆粒水溶剤 ※	2,000倍	収穫前日まで／2回以内	アザミウマ類
ディアナSC	2,500～5,000倍	収穫前日まで／2回以内	アザミウマ類
モベントフロアブル	2,000倍	収穫前日まで／3回以内	アザミウマ類

注) 1. 備考欄のアザミウマ類は、農薬登録の対象害虫がアザミウマ類であることを示します。

2. 表1、2の※印は、同一系統（材コノド）で、抵抗性害虫の出現を防ぐため、連続使用は避けてください。

表2 キュウリ コナジラミ類の主な防除薬剤（平成28年11月29日現在）

薬剤名	使用量または希釈倍率	使用時期／使用回数
ベリマークSC	400倍 25ml/株 灌注	育苗期後半～定植当日／1回
	または 800倍 50ml/株 灌注	
ベストガード粒剤 ※	1g/株 株元散布	育苗期／1回
	または 1～2g/株 植穴処理土壌混和	定植時／1回
アプロードエースフロアブル	1,000～2,000倍	収穫前日まで／3回以内
ウララDF	2,000倍	収穫前日まで／3回以内
コルト顆粒水和剤	4,000倍	収穫前日まで／3回以内
コロマイト乳剤	1,500倍	収穫前日まで／2回以内
サンマイトフロアブル	1,000～1,500倍	収穫前日まで／2回以内
モベントフロアブル	2,000倍	収穫前日まで／3回以内
ハチハチ乳剤	1,000～2,000倍	収穫前日まで／2回以内
スタークル顆粒水溶剤 ※	2,000～3,000倍	収穫前日まで／2回以内

農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。

※JA全農いばらきホームページでもご覧になれます。



JA全農いばらき

生産資材部 営農企画課

電話：029-291-1012 FAX：029-291-1040